

## 二 降水量

### (1) 福岡県の降水量分布

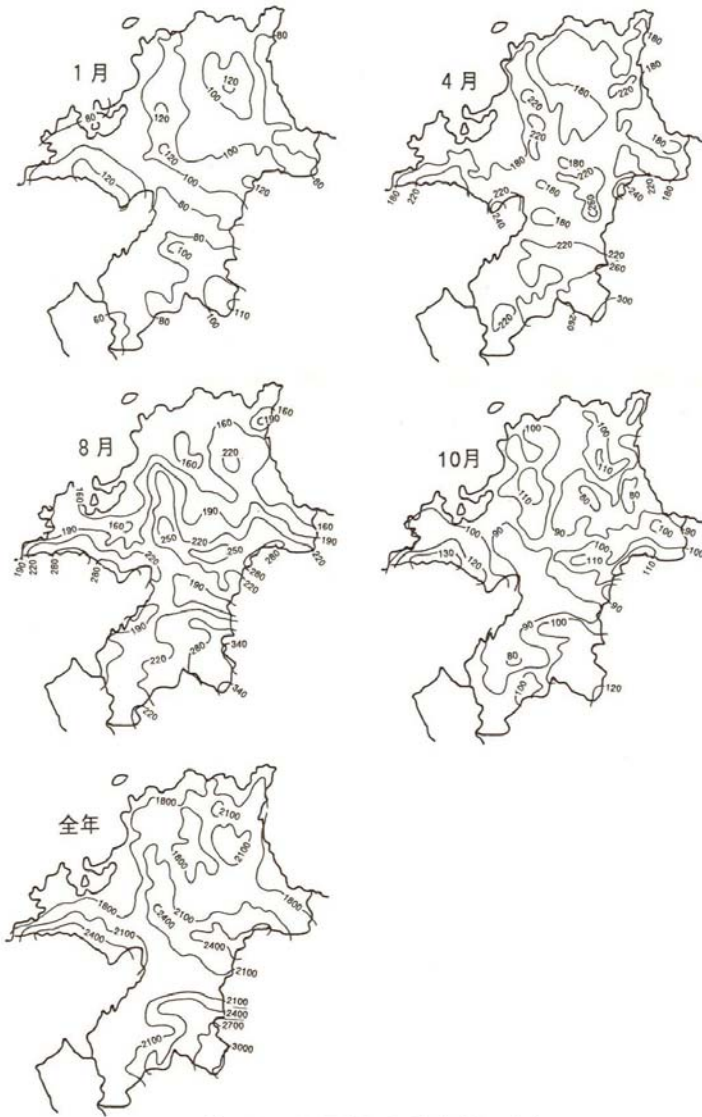
メッシュ気候値による福岡県の年降水量と、一月(冬)、四月(春)、八月(夏)、一〇月(秋)の月降水量の分布を第14図に示す(福岡管区気象台、一九九〇)。

年降水量は、県の北部沿岸や筑豊地方・周防灘沿岸は一五〇〇〜一八〇〇<sup>ミリ</sup>(福岡は一六八九<sup>ミリ</sup>)で最も少ない。筑後地方は一八〇〇〜二〇〇〇<sup>ミリ</sup>である。山沿いでは二二〇〇<sup>ミリ</sup>前後、山地は二四〇〇<sup>ミリ</sup>以上に達する。

一月は地域差が少なく、平野部は六〇〜九〇<sup>ミリ</sup>、山沿いで一〇〇<sup>ミリ</sup>、山地は一〇〇<sup>ミリ</sup>以上となり脊振山の一四〇<sup>ミリ</sup>が最も多い。

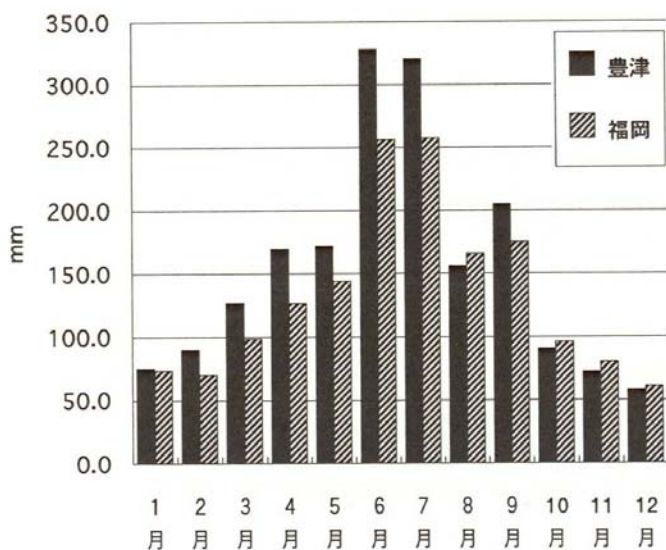
四月になると、福岡地方と筑豊地方が一五〇〜一八〇<sup>ミリ</sup>、北九州市は一八〇<sup>ミリ</sup>前後である。また、筑後地方は北部で一八〇<sup>ミリ</sup>前後、中部より南では二〇〇<sup>ミリ</sup>前後と、他の平野に比べ多くなっている。山沿いは二〇〇〜二二〇<sup>ミリ</sup>、山地は二四〇<sup>ミリ</sup>以上となる。

盛夏期の八月は、県東部の周防灘沿岸や北九州の沿岸で最も少なく、一三〇〜一六〇<sup>ミリ</sup>である。福岡地方や筑豊地方は一六〇〜一九〇<sup>ミリ</sup>、筑後地方は一九〇〜二〇〇<sup>ミリ</sup>となっている。山沿いは二二〇<sup>ミリ</sup>前後、山地は三〇〇<sup>ミリ</sup>を超える所がある。



第14図 福岡県の月降水量の分布  
(福岡管区気象台 1990)

十月は筑豊地方から県の東部にかけては、八〇〇〜九〇〇メートルと最も少ない。そのほかの地域は九〇〇メートル前後、多い所で一〇〇〇メートルくらいである。山沿いから山地は一〇〇〇メートル、多い所では一三〇〇メートルを超える。



第15図 豊津と福岡の降水量分布比較

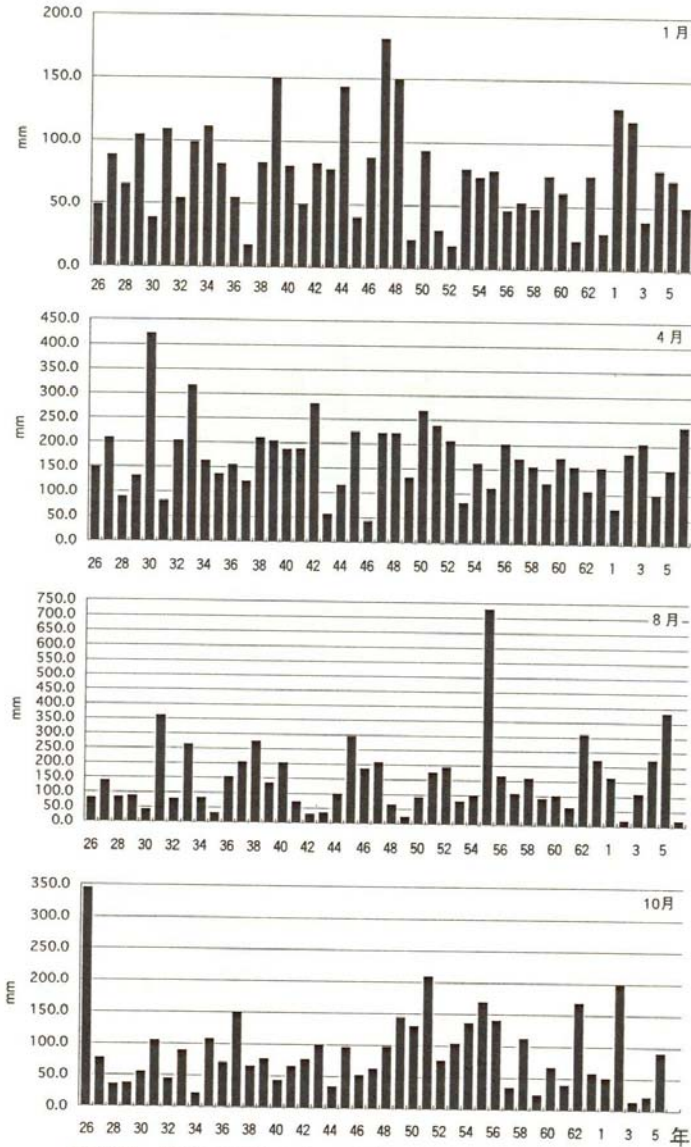
(2) 豊津町の降水量分布

降水量も、気温と同様に福岡県農業総合試験場豊前分場の資料を、豊津町のデータとして使う。

この地点では、降水量の月平均値は第15図のとおりである。年降水量の一八三八・二ミリメートルで、福岡県全体では、一八〇〇ミリメートル以下の降水量は周防灘から響灘、玄界灘の沿岸部と筑豊地方に分布する。しかし内陸の山地部や筑後地方の平野部では一八〇〇ミリメートルを超える。平成六年版の『理科年表』では、福岡市の年降水量は一六〇四ミリメートルで、これに比べれば、豊津の方がやや内陸の要素が強く表れているといえる(第15図)。月別には、八月、十月、十一月、十二月以外は豊津の方が多い。八月の降水量が少ないのは、瀬戸内海の影響が表れていると考えられ、冬季は山の陰をなすことで、少ない値が出ているようである。

豊津における昭和二十六年から平成六年までの、一月、四月、八月、十月(平成五年まで)の

第1編 歴史の背景としての自然



第16図 豊津の昭和26年～平成6年8月の降水量の推移

(1月、4月、8月、10月)

降水量を第16図に示した。  
 一月は平均値が七五・三ミリメートルである。これまで極端に少ないのは昭和三十七年の一七・七ミリメートル、四十九年の二三・〇ミリメートル、五十二年の一八・三ミリメートル、六十一年の二三・二ミリメートルなどである。逆に極端に多い降水

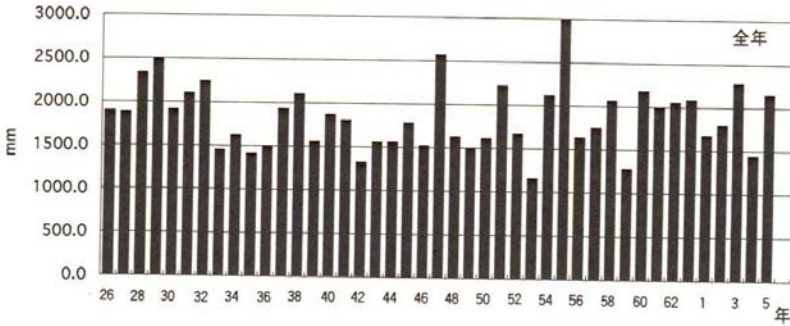
量は昭和三十九年の一四九・七<sup>ミリ</sup>メートル、四十四年の一四三・六<sup>ミリ</sup>メートル、四十七年の一八二・二<sup>ミリ</sup>メートル、四十八年の一四九・五<sup>ミリ</sup>メートルである。気温と降水量に相関があるわけではないが、一月の降水量が極端に少ない年は、年平均気温も低めの傾向があるようにみえる。多いときはほとんど平均的な気温である。

四月は昭和三十年が極端に多く、四二二・一<sup>ミリ</sup>メートルである。それに三十三年の三一六・三<sup>ミリ</sup>メートル、四十二年の二八一・三<sup>ミリ</sup>メートル、五十年の二六八・六<sup>ミリ</sup>メートルが続く。逆に最少降水量は四十六年の四三・二<sup>ミリ</sup>メートル、四十三年の五七・〇<sup>ミリ</sup>メートル、平成一年の七二・二<sup>ミリ</sup>メートルが続く。

八月は昭和五十五年が極端に多く、七二九・四<sup>ミリ</sup>メートルである。それに平成五年の三八四・〇<sup>ミリ</sup>メートル、三十一年の三六一・四<sup>ミリ</sup>メートルが続く。八月の降水量が多いということは、梅雨による降水が多いことを示しており、本来六月、七月の梅雨の時期が八月まで続いたことを示し、逆に八月の降水量が小さい年はかなり頻繁にみられ、これは干ばつの被害にあつた可能性を示している。昭和三十年の四二・一<sup>ミリ</sup>メートル、三十五年の三一・一<sup>ミリ</sup>メートル、四十二年の二九・九<sup>ミリ</sup>メートル、四十三年の三四・八<sup>ミリ</sup>メートル、四十九年の二五・二<sup>ミリ</sup>メートル、平成二年の一八・八<sup>ミリ</sup>メートル、平成六年の一九・〇<sup>ミリ</sup>メートルなどがそれに当たる。

十月の降水量は、一部台風の影響を反映している。通常は九月の極大が台風による降水で、十月はその影響がかなり小さくなる。しかし、昭和二十六年には三四四・七<sup>ミリ</sup>メートルの降雨があり、最も大きな値を示している。これは十月十四日のルース台風（台風一五号）による降雨と思われる。

全年の合計では、昭和五十五年が、飛び抜けて大きい降水量を示している（第17図）。合計二九八九・七<sup>ミリ</sup>メートルであり、平均値を一一〇〇<sup>ミリ</sup>メートル超えている。これは七月の降水量九六〇・九<sup>ミリ</sup>メートルと八月の降水量七二九・



第17図 豊津の昭和26年～平成6年8月の降水量の推移 (全年)

四メートルによるところが大きい。六月の降水量が一七五・一メートルと、平均の五五センチであることから、この年は遅れて梅雨に入り、梅雨明けが極端に遅れ、また集中的に豪雨が続いたことによる。この点については前項の冷夏の部分で述べたとおりである。昭和四十七年は二五七三・五メートルで、この年は六月に五〇七・七メートル、七月に五七〇・七メートルと梅雨の時期の降雨が多かったことと冬季の降水量などが全体的に多いことによる。

逆に全年の合計で降水量が少ないのは、昭和五十三年(二一六〇・〇メートル)、五十九年(二二八一・二メートル)である。昭和五十三年は六月に二五七メートルの降水量があつたが、七月に六五・三メートル、八月に七八・一メートルと梅雨季の降水量の少なさが大きく関与している。これにより、福岡地方は極端な水不足になり、福岡大渇水と呼ばれている。昭和五十九年も全く同じパターンで、やはり梅雨季の降水量の少なさが、全年の少なさの原因をなしている。

平成六年の夏は日本各地で高温と少雨で特徴づけられ、福岡市でも観測史上初の記録が書き換えられた。豊津町では七月に三一・〇メートル、八月に一九・〇メートルと、昭和五十三年を上回る少雨を記録している。これについては後述する。